

## 後期アマルティア・センの開発思想

著者	絵所 秀紀
出版者	法政大学経済学部学会
雑誌名	経済志林
巻	69
号	2
ページ	155-192
発行年	2001-09-29
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/1433">http://hdl.handle.net/10114/1433</a>

## 【研究ノート】

## 後期アマルティア・センの開発思想

絵 所 秀 紀

## 1. エンタイトルメント論の展開

## 1-1 ベンガル飢饉分析と交換エンタイトルメント

1970年代後半になると、突如としてセンは、「エンタイトルメント (entitlement)」という概念を駆使して飢饉分析に乗り出した (Sen 1976; Sen 1977a; Sen 1980a)。1943年のベンガル飢饉をテーマとしてとりあげた研究は、それまでのセンの研究とは相当異質なアプローチを提唱したものである<sup>(1)</sup>。「後期セン」の始まりを告げる研究である (Basu 1999)。

「飢餓と交換エンタイトルメント：一般的アプローチと大ベンガル飢饉への適用可能性」(Sen 1977a)は、何度読み返しても心吸いこまれる。理論家としての地位を確立した従来 of センには見られなかった、緻密な実証に溢れた、またストーリー性に富む、歴史と理論を架橋した異色の論文である。

1943年のベンガル飢饉は「過去100年において最大の飢饉」であったが<sup>(2)</sup>、センはこの飢饉を「今日の開発理論、すなわち飢餓の政治経済学」と関連させて分析するという試みを行なった。良く知られているようにこの論文でセンが主張したことは、「現代の飢饉と飢餓」は、1人当りの食料利用可能量 (すなわち「あまりにも多い人口数、あまりにも少ない食料」) という観点からは分析できないという点である。センが「食料利用可能量減少 (FAD: Food Availability Decline)」と名づけた仮説である。その代わりにセンが提出したのが「交換エンタイトルメント (exchange en-

titlement)」仮説である。センによると、「交換経済では、交換条件はそれ自身で重要な要素をなす。ある家族の食料購入能力は、その家族の労働およびその家族が所有する財の食料への転換率に依存している」(強調原文)。すなわち「ある家族が飢餓に陥るかどうかは、その家族が何を売らなければならないか、それらを売却することができるかどうか、いくらで売却できるか、そして食料の価格はいくらか、ということに依存している」<sup>(3)</sup>。

ここでセンが強調した点は、「交換経済」という枠組みである。センによると、「交換経済」においては「エンタイトルメント」は各人の「エンダウメント (endowment)」に関係している。「エンダウメント」とは、通常の経済学用語では「生産要素の賦存」を意味する術語であるが、センはこの用語を「ある人が生まれた時から備えている様々な資質や能力」といった意味で使用した。要するに、「ある人が親から受け継いだもの」である<sup>(4)</sup>。「エンダウメント」は、1単位の財  $x$  を一定の単位の財  $y$  へと転換する能力を人々に与えることになる。後にセンは、「エンタイトルメント」を「ある個人が支配することのできる一連の選択的な財の集まり」、すなわち「ある人が消費を選択することができる財の集まり」と定義した。そして個々人のエンタイトルメントは、その人の「エンダウメント」とその人が交換を通じて獲得できるもの（すなわち「交換エンタイトルメント」）の双方に依存していると説明した。ある人の「エンダウメント」は、例えば労働者の労働力であるとか、地主の土地保有とかである。「エンダウメント」は、交換を通じて選択的な財の集まりを保有するという形で、エンタイトルメントを確立するために使用される (Sen 1983a)。

センによると、交換エンタイトルメントは「関連した交換率に依存しているだけでなく、市場の不完全性、およびその他の制度的障害、問題となっている財を売買できる現実的な可能性に依存している」し、また「財に対する支配に影響を与える、失業手当のような様々な制度的取り決め」にも依存している。「飢饉は異なった職業グループの生存がかかっているゲームのルールを変更するような、交換エンタイトルメントの変動の結果」と

して理解されうる。こうした観点から見ると、FAD アプローチは、「交換経済の中心的な特徴」を見逃していることになる。その上で、センはいくつかの留意点を書き記している。(1) 交換エンタイトルメント・アプローチは、すべての飢饉を説明するものではない。例えば自給自足的な猟師や小農を襲うような飢饉のケースにはあてはまらないし、また交換経済においても（健康を含む）資産の喪失から生じる飢餓のケースにはあてはまらない。(2) 交換エンタイトルメントの変更によって引き起こされる飢饉であっても、交換エンタイトルメントの変更は様々な理由によって生じるのであって、「究極の原因」は実際には無限である。つまり交換エンタイトルメント・アプローチはある特定の「究極的な」説明理論を提供するものではなく、飢饉分析の「構造」を提供するものである、という点である。

以上のような分析の道具立てを述べたあとで、センはベンガル飢饉の分析にとりかかった。センは、飢饉に至るまでの、また飢饉期間中の、ベンガルの経済状況を3つの時期に分けた。すなわち、

第1局面：1942年当初～1943年3月

第2局面：1943年3月～1943年11月

第3局面：1943年11月～1944年一杯、である。

この時期区分に従って、センは次のような観察をしている。(a) 死亡率がピークに達したのは第3局面であるが、その時までには最も激しい飢餓の時期は過ぎ去っており、飢饉で荒廃した国土に疫病が猛威をふるっていた。(b) 第1局面はまだ飢饉が始まっていない時期である。しかし大半の人々は、すでに飢饉への道を開いた経済的困窮状態に陥っていた。しばらくセンの語るところにしたがって、飢饉が生じた道筋を辿っておこう。

飢饉は、1943年当初にカルカッタから遠く離れた地区で始まり、日を追ってカルカッタへと近づいた。死亡率は1943年12月にピークに達し、ながらくその率を持続した。コレラ、マラリア、天然痘といった飢饉によって引き起こされた疫病の結果であった。飢餓と「飢饉による下痢」による直接の死亡率は、すでに1943年の春から夏にかけてピークが過ぎていた。

「カルカッタの工業地域において基礎的な食料供給を維持する」という政府の方針に従って、ベンガル商工会議所等が政府の補助を得て、食料供給サービスを始めた。その結果、カルカッタは「農村の生活困窮者」で満たされることになった。彼らは農村地区からカルカッタまで徒歩で上京してきたのである。1943年7月までに、カルカッタの道という道は彼らで埋めつくされた。救済事業が、最初は私的な慈善事業として、後には政府の公的な政策として実施された。しかし、施された救済策はまったく不十分であったために、「街のいたるところで死体が見つかった」。やがてカルカッタでは最悪の事態は過ぎ去ったが、地方では飢饉によって引き起こされた疫病のために、死亡率は上昇しつづけた。

以上が、飢饉の経過報告である。胸痛む、実にリアリティに富む叙述である。ついでセンは、ベンガル飢饉に関する政府委員会の報告書『飢饉調査委員会：ベンガル報告』（GOI 1945）を批判的に検討した。『飢饉調査委員会：ベンガル報告』は、飢饉の主原因を「ベンガルにおける深刻な消費可能な米の総供給不足」に求めたもので、FADアプローチを採用した報告書である。センはセンサス統計やいくつかの研究を検討して、ベンガル飢饉が「食料穀物の著しい全体的な不足」を反映したものではないことを示した。ベンガル飢饉はFADアプローチでは説明できないという主張である。ではセン自身が提案した交換エンタイトルメント・アプローチによる説明は、どのようなものであるのか。

センは、ベンガル飢饉が「本質的には農村の現象」である点に着目した。都市地域とくにカルカッタは、食料配給制度が実施されたために、食料価格の上昇の被害から免れることができた。そこでの問題は、主に農村の生活困窮者の流入であった。農村の生活困窮者の増加を「交換エンタイトルメントの変化」という観点から理解するというのが、センの見方である。具体的には、米価に対する農業労働者の賃金や各種の財（小麦粉、マスタード・オイル、布、竹傘、ミルク、魚、散髪）の相対価格（交換比率）の変動を詳細に検討した。結論は次のようなものである。「米に対する交換エ

ンタイトルメントの悪化を蒙らなかったグループは、大農および小農を含む米生産者であった。同様のことは、ある程度まで分益小作にもあてはまる。分益小作の収穫の取り分は生産（この場合は米）の一定比率に固定されているためである。勿論、分益小作の雇用機会は減少しうるが、しかし交換率という観点から見たときの彼らの位置は賃金労働者よりはるかに脆弱なものではなかった。農業労働者の賃金は貨幣で固定されているためである」。つまり「農民および分益小作に対する飢饉の影響は農業労働者や一定の財・サービスの売り手（漁民、職人、床屋など）に対する影響よりも小さかった」。

センが着目したのは、「職業グループ」ごとに飢饉の影響が異なるという点である。「飢饉の犠牲者」すなわち「生活困窮者」の「階級的基礎」を重視するという観点である。最も困窮の程度が大きかったのは農業労働者であり、ついで漁民、非農業労働者、職人等である。一方、困窮の程度は農民と分益小作ではそれほど大きくなかった。そして、これは「交換エントタイトルメント・アプローチから予測される結果と同じ」であると論じた。この部分の実証研究に関して、センはマハラノビスたちが行なった調査結果に多くを負っている。また飢饉の影響を「職業グループ」別に検討するという見方も、マハラノビスたちの研究を受け継いだものであった（絵所 2001）。

食料問題に対するインド植民地政府の考えは、食料の「必要量」と「利用可能量」をベースに据えて「実際の不足量」を推計するというものであった。飢饉調査委員会もこの考えに染まっていた。しかしセンによると、このFADアプローチは、「暗い部屋の中で、いもしない猫を探す」ようなものであった。「食料を自ら育成しない人（例えば、職人あるいは床屋）、あるいは食料を育成するが所有することのない人（例えば、現金払いの賃金農業労働者）にとって、市場のきまぐれは彼等の生き延びる能力に決定的な影響を与えうる」（強調原文）という点に関して、まったく注意を払うことがなかった。すなわちインド植民地政府の失敗は「間違った理論」

を採用した結果として生じたものである、と論じた。

センの主張した交換エンタイトルメント・アプローチの特色は、すでに明らかなように次の2点にあった。(1) 交換経済すなわち市場経済という制度的枠組みの中で飢饉を考察したこと、(2) 食料の総供給と総需要という集計化された数値からは、飢饉の社会的影響を論じることができないという点を明らかにしたこと。換言すれば、職業グループ（あるいは階級）ごとに脱集計化することによって、飢饉の社会的影響を明らかにしたこと<sup>(5)</sup>、の2点である。脱集計化という手法は、後期セン経済学の特色として、この論文以降ますます磨きかけられるようになる。

論文の最後にセンは、次のように述べた。「発展途上国で交換の重要性が増してきたために、飢饉と飢餓を分析するにあたって、近年ますます交換エンタイトルメント・アプローチの妥当性が高まってきた。（伝統的な小農経済が崩壊する中で）市場への依存が急速に高まり、また社会保障給付という形態をとるエンタイトルメントの保証がいまだ実現しないような発展の中間局面があるように思われる。この移行局面における1つの重要な発展は、商品としての労働力の出現である。この労働力は、小農経済に見られる家族制度による保護もなく、失業補償という保険もない。そして勿論生活できる賃金で労働できる権利の保証もない」。一見して明らかなごとく、「商品としての労働力の出現」とは、まさしくマルクスが資本主義批判の中軸に据えたアイデアである。センがこの論文を著した時点で、前近代社会（前資本主義経済）から近代社会（資本主義経済）への移行問題として「開発」を理解していたことを示すステートメントである。

## 1-2 「発展途上国における公共活動と生活の質」

交換エンタイトルメントという概念を駆使して飢饉分析を行なったセンは、次にエンタイトルメントというより広い概念を使って貧困と生活の質という問題に立ち向かった。世界銀行の『1980年度世界開発報告』<sup>(6)</sup>のバックグラウンド・ペーパーとして書かれた「貧困の水準：政策と変化」を書

きなおした「発展途上国における公共活動と生活の質」(Sen 1981c) 論文である。「生活の質 (quality of life)」という言葉は、「ベーシック・ニーズ」アプローチを提唱するにあたって、グラント (J. P. Grant) やモリス (M. D. Morris) によって使用されたものである<sup>(7)</sup>。センは彼らの精神を受け継いで、寿命 (出世時平均余命) と識字 (成人識字率) の2つの指標をもって「生活の質」をあらわすものとした。

センは、寿命と識字という2つの指標を判断基準に据えた国別比較を通じて、とりわけ韓国とスリランカが貧困の除去に成功した事例であると高く評価し、この2カ国がそれぞれ貧困の除去に成功した理由を明らかにしようとした<sup>(8)</sup>。

早くからわが国でも、韓国は輸出志向工業化戦略を採用したことによって高度経済成長を可能にしたモデル・ケースとしてよく知られてきた (渡辺 1982; Balassa 1981)。しかし韓国では輸出促進を行ないながら、同時に一定の選択された分野で政府は強力な輸入代替戦略をも遂行してきたことも指摘されてきた (今岡・大野・横山 1982; Datta-Chaudhuri 1981)。センも、韓国の経験を政府の強力な介入によって成長に成功した事例として理解した。韓国は「実際に、工業化と成長に政府が積極的な役割を果たす古典的な事例である」と論じ、市場の自由化によって成長に成功したとする新古典派的解釈を退けた<sup>(9)</sup>。その上で、韓国で急速な成長の成果をもたらした要因を「急速な雇用の拡大、そして究極的には急速な実質賃金の拡大」に求めた。つまり、「成長の労働集約的性格」が貧困削減にあたって最も重要な要因であったという解釈である。国際労働機関 (ILO) のスタンスを支持する解釈である。

一方、スリランカのほうはどうであろうか。センが着目したのは、1人当たり国民所得という点ではスリランカはインドやパキスタンとほぼ同一水準であるが、貧困の削減および高い生活の質の達成という点においては、群を抜いているという事実である。スリランカの「所得水準を与えられたものとすると、貧困削減および寿命の増加という点において社会福祉政策



が有利に働いた」(強調原文)ことは疑う余地がない。またスリランカの1人当り食料の利用可能性は、他の低所得途上国をそれほど大きく上回っているわけではない。それにもかかわらず、他の低所得途上国と比較すると栄養失調が少なく、寿命が長いのは「良好な配給制度の結果」であり、それはまた食料配給政策と健康サービスの面における「積極的な政府の政策の結果」であった。つまり「意識的な、断固とした、公共政策」の結果であったと論じた<sup>(10)</sup>。

次にセンが設定した課題は、エンタイトルメントという観点から、貧困削減に成功した韓国とスリランカという2つの類型をどう理解するかという問題である。センは次のように論じた。

- (1) それぞれの経済・政治制度は、その制度の中で誰が何を所有するかを支配するエンタイトルメント関係を生み出す。貧困の除去は究極的にはエンタイトルメントの増加を意味する。
- (2) 市場経済においては、エンタイトルメントは「所有のベクトル」と「交換エンタイトルメント・マッピング」の2つによって決定される。
- (3) 韓国と台湾で用いられた貧困除去の方法は、許容できる賃金での雇用を保証する1つのやり方である。これは労働吸収的生産過程を使用した急速な経済成長によって可能になった。
- (4) 対照的にスリランカでは、失業水準は高く、賃金(とりわけプランテーション部門での労働者のそれ)は極めて低い。そこでは基礎的なエンタイトルメントの保証は、「市場を通して」達成されたのではなく、政府に対する直接的な権利という形で「市場の外」から達成された。
- (5) しかしそれぞれの方法は異なっているが、2つの戦略の間には類似点がある。「所得分配のパターン」に着目するならば、両戦略の類似点は一層明らかになる。すなわち、人々の間で「エンタイトルメントが広範に分配された」という点に類似点が見出せるという指摘である。

- (6) のみならず公共政策が「積極的な役割を果たした」という点においても類似点が見出せる。
- (7) 学ぶべき教訓は、貧困削減の道具を模倣することではなく、様々な道具の「機能的な役割」を理解することである。

## 2. ケイパビリティ論と開発経済学

### 2-1 何の平等か

センの関心は実に広範囲に及んでいる。処女作『技術の選択』(Sen 1960)で、「計画された経済発展を試行する低開発経済における生産技術の選択」規準の問題を論じたと思う間もなく(絵所 2000),次にセンが立ち向ったテーマは厚生経済学・社会選択論の分野であった。その成果は『集合的選択と社会的厚生』(Sen 1970)として結実した。社会選択論の分野における記念碑的労作であり、デリー・スクール・オブ・エコノミクス(DSE)時代の最後を飾る傑作である。その後インドを離れてからも、センは厚生経済学・社会選択論分野での革命を目指し続け、1998年のノーベル経済学賞に輝いた(Royal Swedish Academy of Science 1999; Arrow 1999; Atkinson 1999; Roy 1999)<sup>(1)</sup>。

センが始めて「ケイパビリティ (capability)」という言葉を使用したのは、1979年にスタンフォード大学で行なわれた「人間の価値に関するタナー講義」である。「何の平等か」(Sen 1980b)と題するこの講義も、厚生経済学の再検討をもくろんだものであった。道徳哲学の議論の流れにおいて厚生経済学を再検討するという、センの特色がにじみ出た講義である。この講義の中でセンは、平等の基準をめぐる議論を代表する3つの見方を批判的に検討した。3つの見方とは、(a) 功利主義者の主張する平等、(b) 総効用の平等、(c) ロールズ主義者の主張する平等、である。(a)と(b)はいずれも「厚生主義 (welfarism)」の一種である。このうち(a)は、功利主義者の言う「善さ (goodness)」という概念を分配問題に応用したも

のである。功利主義者の目的は分配にかかわりなく効用の集計値を極大化することであるが、その際すべての人の限界効用が等しくなることを要求する。これに対し(b)は限界効用ではなく、各人の総効用の平等を重視する立場である。(c)は「基本的な社会財」の平等を求める立場である。ロールズの主張する「基本的な社会財」とは、「すべての合理的な人間が欲すると推定されるもの」であって、その中には「権利、自由と機会、所得と富、自尊の社会的なベース」が含まれる。とりわけロールズが重視したのは基礎的な自由であって、したがって自由の原理に第一の優先度が置かれる。効率性と平等を要求する第2原理が、これを補完するものとして位置づけられている。ここから、最も不遇な人々の利益を促進することを優先すべきだとする「格差原理」が導き出される。以上がロールズの主張する平等論である<sup>(12)</sup>。

センによると以上述べた3つの平等論は、いずれも「基礎的なケイパビリティ」—「ある人が一定の基本的な事柄をなしうること」—に対する考察がかけられている。こうしたセンの批判は、「人間は多様である」という考えによって支えられているものである。「財のケイパビリティへの転換は人それぞれ大きく異なる」という事実を思い起こすならば、財の平等はケイパビリティの平等を意味しないという主張である<sup>(13)</sup>。

## 2-2 開発経済学の再検討

「開発経済学の勃興と衰退」と題したハーシュマンの論文は、開発経済学の一大転換を示したものとして学会に大きな衝撃を与えた(Hirschman 1981)。この論文の中でハーシュマンは、「固有の意味での」開発経済学（すなわち「構造主義開発経済学」）の死亡宣告をしたためた。ハーシュマン自身が構造主義開発経済学の代表的提唱者の一人であったことを考えると、この論文はいわば開発経済学者としての彼自身の死亡宣告でもあった。事実、1980年代になると、新古典派開発経済学が構造主義開発経済学にとってかわった。ハーシュマンの言葉を使うならば、新古典

派経済学という「モノ・エコノミクス (mono-economics)」が開発の世界で猛威を振るうようになったのである (絵所 1997, 第2章)。

センの「開発：今何処に」(Sen 1983a) は、開発経済学に対するハーシュマンの否定的評価に疑義をはさみ、ハーシュマンとは異なった観点から開発経済学の進むべき道を示したものとして、これまた学会に大きな衝撃を与えるものであった。

センによると、ハーシュマンが嘆いた構造主義開発経済学<sup>(14)</sup>の「死亡宣告」は「時期尚早」である。センは、構造主義開発経済学の中で開発戦略にかかわる主要なテーマは次の4点であったと指摘した。すなわち、(1) 意図的な工業化、(2) 急速な資本蓄積、(3) 不完全就業労働力 (余剰労働) の動員、(4) プランニングと政府の積極的な介入、である。センによると、これら4つのテーマは決してその有効性を失ったわけではない。資本蓄積も工業化も経済成長と緊密に関係しており、そのテーマの有効性は全く失われていない。労働量の動員はどうであろうか。「労働使用型経済成長」が顕著な成長を達成したことは良く知られている。中国や韓国のケースが典型的である。最後の、プランニングと政府の介入はどうであろうか。低所得途上国のうち成長率の高かった上位3カ国、すなわち中国、パキスタン、スリランカは、いずれも政府が積極的に介入した途上国である。中所得途上国のうち成長率が高かった上位3カ国、すなわちルーマニア、ユーゴスラヴィア、韓国は、これまたいずれも政府が積極的に介入したケースである。問題は政府の介入が精力的であったかどうかではなく、経済局面への政府の体系的な関わりかたであり、計画された経済発展の遂行にかかわっている。

新古典派経済学の開発経済学分野への侵食に断固として立ち向かい、構造主義開発経済学を力強く防戦した議論である。しかしセンの狙いは、新古典派経済学に対して構造主義を防御する点にあったのではない。そうではなく、構造主義の限界を指摘し、あわせて新古典派経済学を乗り越える論点を示すことにあった。「伝統的開発経済学の本当の限界は、経済成長

という目的に対する手段の選択という点にあるのではなく、経済成長がその他の諸目的に対する手段以上のものではないという点を十分に認識しなかった点にある」。1人当たり所得が大きく異なっているにもかかわらず、寿命、識字率、健康、教育の達成水準が同一であるという事実を目を向けるべきであるという指摘である。たとえば中国やスリランカの1人当たりGNPはブラジルあるいはメキシコの7分の1にすぎないが、寿命はほぼ同一である。「もし貧しい途上国の政府が健康と平均余命の水準を引き上げることに熱心であるならば、公共政策と社会変化によって直接これらの目的に向かうのではなく、1人当たり所得を向上させることによってこれらの目的を達成しようとするのは、まったく馬鹿げたことである」。

こうした考えに立って、センは人々の「エンタイトルメント」と「エンタイトルメントが生み出すケイパビリティ」を基準に据えて、開発を評価すべきであると提案した。「究極的に経済発展のプロセスは、人々にとって何ができるかあるいは何ができないかにかかわっている。すなわち、長く生きられるのか、避けられ得る病を避けることができるのか、十分に栄養を摂取できるのか、読み書きができ他者とコミュニケーションできるのか、文学的・科学的営みに参加できるのか、等々である」<sup>(15)</sup>。

この論文が注目される1つの理由は、飢饉論で提示したエンタイトルメントという概念と平等の基準を論じる際に提示したケイパビリティという概念が2つとも用いられ、「開発」という観点から重要視されている点にある。この論文でエンタイトルメントは、「ある人が直面する諸権利と諸機会の全体を使用する社会において、その人が支配することのできる一連の代替的な財の束」と定義され、またエンタイトルメントはその人の「オーナーシップ（すなわちエンダウメント）」と「交換エンタイトルメント」によって制約される、とした。そして「このエンタイトルメントをベースにして、人は一定のケイパビリティ、すなわちあれこれのことをする能力（例えば十分な栄養を摂取できる能力）を獲得できたり、その他のケイパビリティを獲得できなかったりする」。つまり、「経済発展のプロセスは

人々のケイパビリティ拡大のプロセスとして見る事ができる」と論じた。

これだけでは両者の関係はややわかりにくい。セン自身、次のような脚注を加えている。まずは、「交換エンタイトルメント」についての脚注である。(1) 交換エンタイトルメントはエンタイトルメントの構図に中においてわずかに一部をしめるだけである。オーナーシップ（あるいはエンダウメント）を考慮に入れないならば、エンタイトルメントは十分ではない。(2) 交換エンタイトルメントは交易あるいは市場取引を含むだけではない。それは生産可能性の利用（すなわち「自然との交換」）をも含んでいる。つぎに取り上げたのは、(a) ケイパビリティと (b) エンタイトルメントと (c) 効用との相違についてである。センはこう説明した。すなわち、「ある人の福祉 (well-being), あるいは生活水準, あるいは積極的な意味での自由」を語るためにはケイパビリティという概念が必要になる。ある人にとって「何ができるか」ということ（ケイパビリティ）は、「どの程度の喜びあるいは欲望の充足が得られるか」ということ（効用）とも異なるし、ある人が「支配できる財の束はどのようなものか」（エンタイトルメント）とも異なる。したがって、開発を評価するためには、単に国民生産や集計的な実質所得を計算するだけでは不十分であるばかりでなく、財の束に対するエンタイトルメントそれ自身を計算するだけでも不十分である。またケイパビリティは効用という心的な尺度に集中することとも異なっている。この対比は、「喜び」と「積極的な自由」との対比と似ている。「エンタイトルメントの特殊な役割は、ケイパビリティに対するその影響を通してである。つまり、エンタイトルメントは「ケイパビリティの導関数にとどまる」（強調原文）、と。

この論文以降、センの主要な関心はエンタイトルメントからケイパビリティへと移っていくことになった。

### 2-3 ケイパビリティ・ファンクショニング・エイジェンシー

1960年代後半になると、「開発の世界」において成長優先の開発戦略に対する批判が湧き起こってきた。人々のベーシック・ニーズ（BN）を満たすことを開発の目的として設定すべきであるとの声が高まってきた。開発研究における改良主義アプローチの誕生である（絵所 1997a, 第3章）。

これに対し、センは一層深い地点から「開発の意味」を根本的に問い返す作業を始めた。「ケイパビリティ」、すなわち「個々人が生きていく上で選択できる生活の幅」という概念を軸にして、開発の意味を考えるという作業である（Sen 1988a）。

センが強調したのは、貧困とは個々人の基礎的なケイパビリティが欠如している状態のことであり、開発とは個々人のケイパビリティの拡大を意味するという考えである。新古典派アプローチだけでなく、BNアプローチをも含め、開発の意味を財とサービスの充足におしとどめてきた財志向アプローチから、「生活の質」あるいは「福祉＝良く生きること（well-being）」の意味を問う人間志向アプローチへと転換する試みである。センによると、BNを「基礎的な財の一定の最低量を満たすこと」と見なすことは、財の「物神崇拜」につながる（Sen 1990a, p.47）。BNアプローチは、その問題提起の具体性および緊急性にもかかわらず、効用に基礎を置く伝統的な厚生経済学の中では、まともにとりあげられることはなかった。開発経済学と新古典派経済学に基礎を置く厚生経済学との間には大きな溝があり、両アプローチはすれちがったままであった。何故か。センによると、その原因は、BNアプローチの問題提起は表面的なものにとどまり、「効用」概念とのかかわりを明確にできなかったためである。BNは「分析の中間段階」に属する概念であり、より基礎的な哲学的・倫理的な概念によって裏づけられなければならない。この基礎づけは、「効用」によっても「ケイパビリティ」によってもなしうるが、後者のほうがよりすぐれているというのが、センの主張である（Sen 1987a, pp.24-26）。

ケイパビリティ論は、「効用」に基礎を置く新古典派厚生経済学を徹底的に批判する中から生み出されたものである (Sen 1985b; Sen 1987b)。効用理論に対する彼の批判の要点は、次の表現の中に凝集されている――「極貧から施しを求める境遇に落ちたもの、かろうじて生延びてはいるものの身を守るすべのない土地なし労働者、昼夜暇なく働き詰めで過労の召使い、抑圧と隷従に馴れその役割と運命に妥協している妻、こういったひとびとはすべてそれぞれの苦境を甘受するようになりがちである。かれらの窮状は平穩無事に生延びるために必要な忍耐力によって抑制され覆い隠されて、(欲望充足と幸福とに反映される) 効用のものさしには、その姿を現さない」(Sen 1985b, pp.15)。この「苦境を甘受する」という心理的な反応は、新古典派厚生経済学ではまったく分析することができないではないか、という批判である<sup>(16)</sup>。

『財とケイパビリティ』(Sen 1985b) は、ケイパビリティ論の基礎となる「機能 (functioning)」<sup>(17)</sup> という概念を体系的に論じたものであり、厚生経済学と開発経済学との架橋を試みた研究として着目される。1982年にアムステルダム大学で行なったヘニップマン講義をベースにした、小さな書物である。本書のテーマは、「福祉 (well-being)」と「相対的有利 (advantage)」という2つの観点から、ある人の「利益 (interest)」とその実現という問題を検討することに置かれた。センによると、“well-being” はある人の「達成 (achievement)」, すなわち「彼あるいは彼女の『人生 (being)』がどのように『いいのか』」(すなわち「人生の善さ」) をあらわす概念である。また「相対的有利」は、とりわけ他者と比較した時に、その人が持っている「実際の機会 (opportunity)」をあらわす概念である。機会は達成された結果によってのみ判断されるものではなく、したがって達成された「人生の善さ」の水準のみによって判断されるものではない。両者は異なるものである。センが本書で試みたことは、「人生の善さ」と「相対的有利」という2つのテーマに対して従来提出されてきた様々なアプローチを批判的に検討し、代替的なアプローチを提示するこ



とである。

「人生の善さ」と「相対的有利」を判断する際に、新古典派厚生経済学が採用してきた伝統的アプローチは、(1)「効用」に基づくアプローチである。また、(2)「富裕 (opulence)」に基づくアプローチも提出されてきた。(1)の効用に基づくアプローチは、さらに3つの亜種に分類できる。すなわち効用を、(2-a)「幸福」あるいは「喜び」とみなす立場、(2-b)「欲望充足」とみなす立場、そして(2-c)「選択の実数値表示」とみなす立場、である。(c)はより現代的な厚生経済学で優勢になった解釈である(すなわち、サムエルソンの提示した「顕示的選好」論を継承する立場)。センは、これらの立場をいずれも不十分なアプローチとして避けた。(2-c)は、選択の順序をもって福祉の順序とみなす立場であるが、この立場は選択の動機を無視したもので、あまりにも物事を単純化した見方であると一蹴した。「形式における数学的厳密性と内容における驚くべき不正確さが手にとって進んだ」(p.2) 典型的な事例である。(2-a) および (2-b) の立場に対する批判は、先述した通りである。すなわち、「われわれが実際に獲得するもの、また入手することを無理なく期待できるものに対して示す心理的な反応は、往々にして厳しい現実への妥協を含んでいるかもしれない」(p.15)。となると、個人間で効用のランキングを行なおうとする時、とりわけその弱点が明らかになってしまう。「福祉＝善き人生」と「幸福」あるいは「欲望充足」との関係の評価は、人それぞれであるためである。これに対し、(2)の「富裕」に基づくアプローチの弱点は、財に対する物神崇拜的な見解から逃れられていない点にある。この見解は、「善き人生 (well-being)」を「富裕である (being well off)」と混同したものであり、また「ある人の状態」を「彼あるいは彼女の所有の範囲」と混同するものである、と批判した (p.16)。

こうした批判の上に立ってセンが提出した代替的アプローチは、「機能」と「ケイパビリティ」を軸に据えたものである<sup>(18)</sup>。「財」は様々な特性を持っている。しかしある財の特性がわかったとしても、人がその財を所有

することによって「何ができるようになるのか」ということはわからない。したがって、人の「福祉＝善き人生」を判断するためには、その人の「機能」がわからなければならない、という主張である。「機能」とは、「彼あるいは彼女が行ないうることと、なりうること」を意味する。となると、「善き人生＝福祉」を判断するためには、「財の特性」の「機能の達成」への転換を考察することが重要な論点になる。何故、「機能」は「善き人生＝福祉」を反映するのであろうか。「機能」は、「彼あるいは彼女がどのような人生を生活しているのか」(p.19)にかかわっているからである、と論じた。

不思議なことに『財とケイパビリティ』では、そのタイトルにもかかわらず、ケイパビリティそのものの考察は十分になされていない。「機能」と「ケイパビリティ」との関係が、今一つはっきりしない。後年になってセンは、「ケイパビリティ」を「ある人が経済的、社会的、および個人の資質の下で達成することのできる、様々な代替的な『であること』と『すること』を代表する、一連の機能の束」(Drèze & Sen 1989, p.12)と定義し、また「機能を達成するケイパビリティ」という表現を用いている(Sen 1992, p.4)。つまり、ケイパビリティは「善き人生を得るための自由(あるいは本当の機会)を構成するもの」(Sen 1992, p.40)、あるいは「価値ある機能を達成する自由を反映したもの」(Sen 1992, p.49)である。

『財とケイパビリティ』のあと、センは『生活水準』(Sen 1987a)、『倫理学と経済学』(Sen 1987b)、『不平等の再検討』(Sen 1992)という経済学と倫理学(道徳哲学)との接点を求める3つの重要な著作を発表し、ますますセン経済学(センコノミクス)の世界を深めていくことになる。このうち『倫理学と経済学』では、(1)経済学は「倫理学」と「工学」という2つの異なった起源をもつこと、(2)現代経済学は工学の線にそって高度な発達を見る一方で倫理学の線にそった研究は大きく立ち遅れたこと、(3)現代経済学では自己利益を追求することだけが合理的な経済行動であ

ると解釈されている。しかし、アダム・スミスの議論を良くみると自己利益の追求だけでなく「共感と自己規律」が重要な人間の行動動機として理解されていたこと<sup>(19)</sup>、を明らかにした。その上で、自己利益の追求だけを人間の合理的な行動動機とみなすという現代厚生経済学の重大な欠陥を補正すべく、本書でセンが提出し強調した概念は「エイジェンシー (agency)」である<sup>(20)</sup>。人の行動は、これまでに展開してきた「善き人生＝福祉」という観点とは別に、「エイジェンシー」という観点からも理解することができるという議論である。「エイジェンシー」とは、自分自身の福祉の増進を直接の目的とするのではなく、「自分の家族のため、あるいは自分の属する社会、階級、団体、あるいはその他の目的」のために、「自らが達成したいと欲することを達成すること」(p.43)を意味する。エイジェンシーを追求する結果、人の福祉や幸福感が増進する場合もあれば、逆に減少する場合もある。つまりエイジェンシーとは、「こうなってほしいと自ら欲することを価値づけ、またこうした目的を自分で設定し実現する能力」(p.59)である。

以上センの思想形成の順序に従って、1980年代までに展開されたセン経済学の考え方を示すいくつかの重要な概念を説明してきた。センの思考様式の特徴が、新しい概念の設定とその定義付けの厳密さにあることがよくわかる。一見わずらわしい概念と定義の氾濫と映るセンの議論は、よく見るといずれも開発と貧困（あるいは人間の生と死）にかかわる問題の本質に迫ろうとする試みであることが理解されるであろう。

### 3. 飢餓と公共政策：ケイパビリティ論の射程

#### 3-1 飢饉と栄養失調

ドレーズの協力を得てセンが世に問うた『飢餓と公共政策』(Drèze & Sen 1989)と、彼らが編集した『飢餓の政治経済学』(Drèze & Sen eds. 1990-91)全3巻は、エンタイトルメント、ケイパビリティ、そして「剥

奪 (deprivation)」という基礎的な概念を用いて、急性的な飢餓である「飢饉」と慢性的な飢餓である「栄養失調」とを、現代世界における飢餓の2大類型として考察した、まさしく開発の世界を大きく塗り替えた革命的な書物であった。開発経済学のあり方を問いつづけてきた、センの開発研究の集大成とでもいうべきものである<sup>(21)</sup>。

彼らは、人々のケイパビリティが欠如している状態を「剥奪」と呼び、貧困を基礎的なケイパビリティが「奪われている (deprived)」状態として定義した<sup>(22)</sup>。

死にいたる飢餓は「剥奪」とみなされる。市場経済ではある人のエンタイトルメントは、その人がもともと所有しているものの集まり（つまり「エンダウメント」）と、それを交換と生産によって使用することが得られるさまざまな財の集まり（つまり「交換エンタイトルメント」）によって決定される。もしこの人のエンタイトルメントの中に十分な食糧をとまなう財の集合が含まれていなければ、この人は飢えてしまう。したがって「剥奪」は、この人のエンダウメントが低下する場合（たとえば、土地の譲与とか、病気による労働力の喪失）、あるいは交換エンタイトルメントが不利になる場合（たとえば、失業、賃金の低下、食料価格の上昇、この人が売る財・サービス価格の下落、自営業者の生産の減少）に生じることになる。

しかし現代において、飢饉は栄養失調と比較するとはるかに限定された現象であり、大半はサハラ以南のアフリカ諸国で生じている。これに対し、栄養失調はサハラ以南アフリカ諸国以外の多くの地域（とりわけ南アジア諸国）でもみられ、食料摂取の欠如だけでなく、その他の条件（とくに教育、健康維持、基礎的な公共設備、社会環境）の欠如とも密接に関連している。

ドレーズ=センによると、飢饉は「飢え」を含んでいるが、飢饉のために死にいたる人々の多くは実際には「飢え」そのものによってではなく、飢饉によって引き起こされたさまざまな伝染病のために死にいたっている。

つまり、飢饉は食料に対するエンタイトルメントの剥奪だけでなく、より広いエンタイトルメントの剥奪にかかわる問題である、と論じた。例えば1974年のバングラデシュの洪水によって引き起こされた飢饉の事例をみると、驚くべきことに1971～76年間における穀物の利用可能量は、1974年が最も高かった。まさに穀物の利用可能量がピークになった時に、バングラデシュは飢饉に襲われたのである。明らかに総食料の利用可能量を分析するだけでは、飢饉の性格を理解することはできない。ドレーズ＝センはこうした観点から飢饉防止のための戦略とエンタイトルメント回復のためのさまざまな方策を比較検討し、次のような政策提言をした（Drèze and Sen 1989, pp.118-121）。

- (1) 飢えのために死にはじめている犠牲者に対し、ただ単に食料を急いで送り込むだけでは、効率的な飢饉防止にはならない。所得の創出、健康の維持、食料価格の安定、飲料水の確保、農村経済の回復といった、さまざまな政策分野にかかわる「決定のネットワーク」が必要である。
- (2) 飢饉が生じた時に、人々のエンタイトルメントを保護する戦略を選択するにあたって、飢饉の影響をこうむった人々の職業の特性、家族の成員間での分業のパターン、市場の構造、協同的な農村制度の性格、被害を蒙りやすいグループの移動可能性等が考慮されなければならない。
- (3) 雇用促進戦略は、飢饉の初期の段階で採用されるならば、とりわけ効果的である。人々のエンタイトルメントを保護するためには、つねに混合的な制度が必要である。現金支給をとまなう雇用の提供と、「仕事につくことのできない人々」に対する無条件の救済とを結びつける方法が、もっとも効果的な選択である。

「飢饉と栄養失調」という文脈の中で、次にドレーズ＝センがとりあげたのは、中国とインドの比較である（Drèze & Sen 1989, Ch.11）。センが繰返し取り上げたテーマである（Sen 1983a; Sen 1989）。両国ともにアジ

アの命運を左右する人口と面積の大規模国な途上国である。センは、ただ単に両国の1人当り国民所得や経済成長率を比較するだけでは満足しない。彼の比較の視点は両国の「福祉と基礎的な自由」のありかたである。次のように論じた。

- (1) 1985年の1人当りGNPは中国310ドルに対しインドは270ドルであり、中国のほうが15%高いが、両国の差はそれほど大きなものではない。のみならず中国の経済成長率はおもに1979年の経済改革以降生じたものである。また1人当りカロリー摂取量を比較するとやはり中国(2,620カロリー)のほうがインド(2,189カロリー)よりも良好であるが、中国の改善は1979年の経済改革以降の農業生産と食料生産の急速な拡大によるものである。
- (2) しかし平均余命の指標の動向を見ると中国とインドでは大きな格差がある。1950年代初頭では両国の平均余命は40歳程度でほぼ同じであったが、1985年では中国のそれは69歳とヨーロッパ諸国並みに近づいているのに対し、インドのそれは56歳にすぎない。
- (3) ところが、1958年～61年間に中国の平均余命は20歳代半ばにまで急激に低下している。これは1958年に採用された「大躍進」戦略の失敗によって生じた飢饉のためである。一方、インドではこうした急激な変動は見られない。実際、飢饉防止という点ではインドのほうが中国よりもはるかにすぐれている。独立後のインドが飢饉防止に成功してきたのは、1人当り食料の生産あるいは利用可能性が高まったためではなく、飢饉によって剥奪された人々のエンタイトルメントを保証するような行政機構があったためである。すなわちインド政府は飢饉が生じるたびに飢饉の影響を受けた人々に雇用を保証し、彼らに現金での賃金を支払うことによって市場で売買されている商品を購入できるだけの所得を保証した。のみならずこの政策は公共配給制度によって補助されていた。このような行政機構はイギリス支配下ですでに形成されていたが、植民地時代には機能することはなかった。独立後に

こうした行政機構が機能するようになったのは、政治の性格が変わったからである。すなわち独立後は中央政府であれ州政府であれ、飢饉が生じた際にはただちに救済活動を行わなければ、政治的な命取りになるという構図が定着した。強力な野党と比較的自由な情報配給網があるために、こうしたことが可能になった。

- (4) この点において中国の経験はインドとは全く異なっている。「大躍進」後中国の1人当り食料生産は顕著に低落したが、経済政策は変更されず、飢饉は3年間続き、死者は2,950万人にまで達した。こうした事態は政府を自由に批判しうる野党と新聞とが欠如していたためである。

中国では共産党の一党独裁政権が支配していたために、飢饉が生じた時に適切な措置がとられることなく、多くの犠牲者を出した。しかし他方、栄養失調という問題は解決された。共産中国では、ともかくも人々が最低必要とする衣食住の必要は満たされた。インドの場合は中国とはまったく対照的である。独立後のインドでは民主主義政治体制が確立し、政府を批判しうる野党とジャーナリズムがあったために、飢饉によって大量の犠牲者が出ることはなかった。しかし慢性的な飢餓問題は、議会での議論の対象にならず、ジャーナリズムでもとりあげられないために、中国よりも大きく遅れをとってしまった、という内容である。このような複眼的なものの見方こそ、センの真骨頂である。個々人の「選択の自由」という意味を、新古典派的な「効用」を基礎とする解釈に狭く押しとどめることなく、ケイパビリティという観点から読み直すことによって可能になった視点である。

ノーベル経済学賞受賞後に発表された『自由としての開発』（Sen 1999, pp.180-82）では、飢饉防止と民主主義との間に緊密な相関関係があることが強調されている。その理由としてセンは、2点をあげた。すなわち、(1) 飢饉で支配者が死ぬことはない。非民主主義国家では、支配者は飢饉の防止に失敗しても、その政治的帰結に苦しむことはない。これに対し民

主義は、指導者に飢饉の脅威を防止しようとする政治的動機を与える。

(2) 自由な報道と民主主義は、飢饉防止政策に重大な影響を与えることができる情報を明らかにすることに大きく貢献する<sup>(23)</sup>。

民主主義がより健全な社会の運営を行なう上で決定的に重要な役割を果たし得ることは、何も飢饉防止に限ったことではない。様々な災害や紛争や戦争に対しても、効果的な防止や速やかな対策をとらせることを可能にする。中国文化大革命による犠牲者やソ連チェルノブイリ原子力発電所爆発による犠牲者の数は、民主主義が機能していたならば、はるかに少なくなっただろう<sup>(24)</sup>。

### 3-2 成長媒介保障戦略と政府支持主導保障戦略

貧困削減に成功した事例に関するドレーズ＝センの分析も、大きな影響を及ぼした (Drèze and Sen 1989, Part 3)。センは貧困解決のためには公共政策の積極的な介入が不可欠であるとした上で、貧困解決に成功した事例として2つの類型をあげた。1つは「成長媒介保障」戦略であり、もう1つは「政府支持主導保障」戦略である。ここで「保障」という意味は人々のケイパビリティを保障するという意味である。センによると、香港、シンガポール、韓国、クエートは前者の方法によって貧困問題を解決した事例であり、スリランカ、中国、コスタリカ、インドのケララ州は後者の方法によって貧困問題を解決した国である。前者は従来「トリックル・ダウン」論として知られてきたものである。センは、成長の成果のトリックル・ダウンは自ずから生じるものではなく、それを意識的に社会的な供給に転換しようとする政府の公共政策があって始めて実現するのだという点を強調した。その上で、次の諸点に注意を向けた。

- (1) 成長媒介保障戦略と政府支持主導保障戦略との相違は、政府の積極的な介入と不介入との相違を示すものではない。成長媒介保障戦略を採用した政府は、成長の成果を普及させるうえでしばしばきわめて積極的であり、また成長を促進するうえで決定的な役割を果たしている。



- (2) また両者の対照は、市場による供給と政府による供給との相違を示すものでもない。人々は全般的な豊かさのわけまえを、私的所得の増加によってだけでなく、広範囲な公共の供給によっても獲得することができる。高い成長を達成しながらも、これを社会的供給と結びつける努力を払ってこなかった諸国では、人々の生活の質はほとんど改善しなかった。
- (3) さらに両者の対照は、成長の達成とBNの充足との間のジレンマを示すものではない。成長媒介保障はBNを充足させるための1つのアプローチである。一方、政府支持主導保障は、経済成長という目的の放棄を意味するものではない。両者の相違は、政府支持主導保障を採用したとみなされる国は、豊かになる前に、一定の基礎的なケイパビリティを保障するために大規模な公共の支持を与えたという点にある。
- (4) 成長媒介保障戦略は「無目的の豊かさ」戦略、すなわち見境のない経済拡張とはまったく異なるものである。豊かさの増大が生活の質に与える影響は、所得分配に大きく依存している。また多くの場合、無目的の豊かさと成長媒介保障の相違は、雇用機会の拡張に関係している。成長媒介保障が成功した国では、政府は完全雇用を促進するうえで大きな役割を果たした。
- (5) 政府支持主導保障戦略の事例研究から明らかになったことは、たとえばある国が1人当たりGNPでみてたいへん貧しかったとしても、公共支持プログラムは作動するという点である。すなわち、エンタイトルメント剥奪を克服し、生活の質を向上させることは、ただちに可能である。政府支持主導保障が成長媒介保障よりもすぐれている点は、この即効性である。
- (6) しかし以上の点は、政府支持主導保障が成長媒介保障よりも全般的にすぐれていることを示しているわけではない。後者にはそれ自体の優位性が備わっている。すなわち、成長媒介保障によって将来におけるいっそうの進歩の物的基礎が確立され、栄養失調と急性のエ

ンタイトルメント剥奪が撲滅可能となる。成長媒介保障戦略が成功するためには、成長は参加型（すなわち雇用の広範な創出）でなければならないし、また経済成長によって利用可能となった資源の大きな部分が公共の供給に振り向けられなければならない。つまり公共の支持（とくに公共の供給）が、成長媒介保障と政府支持主導保障に共通する要素である。両者の相違は、タイミングと順番にある。

- (7) 栄養失調に対する公共活動の役割は、食糧摂取量を確保することだけでは十分ではない。人間が「よく生きること」は、人々が支配する財だけにかかわっているだけでなく、むしろ人々が生きる生活（ケイパビリティ）にかかわっている。ケイパビリティは消費される財に依存しているだけでなく、財の「利用」にも依存している。利用変数（財のケイパビリティへの転換）は、人々の生物学的および社会的特性から生じる。たとえば、妊娠している女性がそうでない人と同一水準の栄養状態を保つためには、より多くの栄養を必要とするかもしれない。利用率は、しばしば公共活動と公共政策によって影響される。とくに教育（とりわけ婦人教育）の普及は、慢性的な栄養失調を引き下げるにあたって、めざましい役割を果たしうる。

### 3-3 公共活動の役割：政府の意志と公共の参加

センの発想によって、政治体制およびジャーナリズムの役割とケイパビリティとの関係、女性と男性との間のケイパビリティの相違（Sen 1988b; Sen 1990c）、家族の経済学（Sen 1983b; Sen 1984b）、ケイパビリティ剥奪の2つの形態である飢饉と栄養失調の類型的比較等々、新古典派経済学では無視されてきた幅広い論点のカヴァーされることになった。とくに注目すべきは、貧困問題解決のためには市場のインセンティブだけでなく、公共活動の果たす役割が決定的に重要であることを明らかにした点である<sup>(25)</sup>。

1人当り GNP と健康、栄養、罹病率、死亡率との間には単純な関係は

みられない。各国のデータをみると、GNP と生活水準とは必ずしも歩調を同じくしない。原因は2つある。1つは、GNP は経済の集計的な豊かさの尺度をあたえるものであるが、個々人の生活水準は人口全体にかかわる所得分配に大きく依存しているためである。また1つには、人々によって享受されるケイパビリティは、市場で購入されうる財に対する支配以外の多くの要素に依存しているためである。つまり、1人当り GNP が大きければ、栄養とその他の基礎的なケイパビリティ改善の機会は大きくなるが、この機会は利用される場合もあるし、されない場合もある。この「機会」を目にみえる「達成」に転換するためには、さまざまな形態での「公共の支持」が決定的な役割を果たす。

さらにセンによると、公共活動は「政府の政策」と「公共の参加」の双方から成り立つものである。また公共の参加には、政府の政策に「協力的な参加」と「批判的な参加」があり、ケイパビリティ拡大のためには双方が不可欠であると論じた。すなわち、公共の協力は、公共健康キャンペーン、識字率の向上、土地改革、飢饉救済事業などを成功させるために、不可欠の要素である。一方、政府にこうした努力を適切に行わせるためには、政府による支持を要求する公共からの批判的な圧力が決定的に重要である。批判的機能に貢献する主要なものは、政治的活動、ジャーナリズムの圧力、そして見識ある人々の批判である (Drèze & Sen 1989, Part 4)。

注意すべきは、センは市場の役割を無視しているわけではないという点である。むしろ彼は、現代世界における飢饉を除去するにあたって、市場メカニズムによって与えられるインセンティブが重要な役割を果たすことを強調しており、それは公共活動のロジックにとっても中心となるものであると論じている。しかし、そのインセンティブは、たんに「市場で収益を提供するインセンティブ」とみなされるべきではない。政府がよく計画された公共政策を実行し、家族内の差別をなくすように家庭を誘導し、政党やニュース・メディアが理にかなった要求をするように奨励し、公衆が自由に協力し、批判し、調和することを奨励するようなインセンティブで

なければならない、とセンは主張した。

## おわりに

若き日のセンの研究は、ネルー＝マハラノビス戦略の思考の枠内にあった。いや、ネルー＝マハラノビス戦略の思考の枠内にあったのは、センだけではない。ラージ (K. N. Raj) も、アショク・ルドラ (Ashok Rudra) も、アショク・ミトラ (Ashok Mitra) も、チャクラヴァルティ (Sukhamoy Chakravarty) も、バグワチ (Jagdish Bhagwati) も、スリニヴァサン (T. N. Srinivasan) も、インドのすぐれたエコノミストのすべてがネルー＝マハラノビス戦略の影響下で育ち、インド国民経済建設のあり方について論争した。「時代」というものであった。1965年にネルーが死去し、それとともにインドは政治経済危機に見まわれた。政治経済危機を克服すべく60年代後半にインディラ・ガンジーが登場し、それを契機としてインドの政治経済運営は大きく変った。それ以降、「インド計画化の黄金時代」は二度と戻ってこなかった。インド・エコノミストたちにも、新しい対応が迫られたのである。

センが選択した道は、インドを離れイギリスへ行くことであった。そして1970年代後半になると、ふっきたかのように彼は次々と新しい問題を発見し、新しい論点を提起することになる。エンタイトルメント概念によるベンガル飢饉分析を皮きりに、彼の守備範囲は急拡大を続け、今なおより完全な体系に向けて拡大の歩みを続けている。ノーベル経済学賞受賞後に発表された『自由としての開発』では、開発を「人々が享受する本当の自由を拡大するプロセス」(Sen 1999b, p.3)として捉える試みを行なっている<sup>(26)</sup>。

1991年にインドは対外債務の返済危機を伴う深刻な政治経済危機に陥った。この危機を克服すべく、インド政府は経済自由化を推進する構造調整プログラムに着手した。センはドレーズとの共著の中で、インド経済自由

化の評価を行なった (Drèze & Sen 1995; Drèze & Sen eds., 1996)。彼らが強調したのは、貧困と機会の不平等を根絶するには、「経済自由化を超える」ことが必要であるという点であった。基礎教育と基礎健康ケアに重点を置くべきであると強調し、「人間中心のアプローチ」のためには「参加型成長」が必要であると説いた。そして人々のケイパビリティを拡大するためには、「市場か、政府か」という二分法を克服し、「政府の積極的な役割をより効果的にする」ことが不可欠であると主張した。この主張の中には、もはや難解な研究者センの姿はない。実に簡明で直截な言葉を語る啓蒙家センがいるだけである<sup>(27)</sup>。

何がセンの心を突き動かしているのでしょうか。おそらくセンの心を突き動かし続けてきたものは、インド独立の前日 (1947 年 8 月 14 日) にネルーが行なった歴史に残る演説「運命との約束」であるように思われる。

「何年も前にわれわれは運命と約束した。そして今、われわれの誓約を履行する時がやってきた」。「しかし、われわれが今日祝う成就 (achievement) は、われわれを待っている偉大な勝利と成就に向けてのほんの一步、すなわち 1 つの機会 (opportunity) の始まりにすぎない」。インドの課題は、「貧困と無知と病気と機会の不平等の終焉である」 (cited in Drèze & Sen 1995, p.1)。

ネルーが解決を約束したインドが抱える諸問題—貧困、無知、病気、不平等—は、今なおインドが克服できていない課題である。

#### 《注》

- (1) これら一連の論文は、その後拡張されて『貧困と飢饉』(Sen 1981a) となって結実した。Sen (1981b) ; 黒崎・山崎 (2000), をも参照。
- (2) センはベンガル飢饉による犠牲者の数を 200~300 万人と推計している。センは 9 歳の時に、ベンガル飢饉のすさまじさを目の当たりにした (Sen

1990b; Sen 1999b, p.180)。

- (3) FAD アプローチにはマルサスが『人口論』で展開した議論と会い通じるものがある。マルサスは、長期的に見ると人口規模に比較して食料供給量が減少し、そのために死亡者数が増加すると論じた。センによると、飢餓は「食べるべき十分な食料がない」という問題ではなく、「食べるべき十分な食料を人々が持っていない」という問題である (Sen 1981b)。
- (4) 後年センは、「エンダウメント」を「オーナーシップ (ownership)」という言葉で言い換えている (Sen 1983a)。
- (5) 「職業グループ」に着目するという観点では、貧困層を見出し、彼らにターゲットするといういわゆる「ターゲティング」問題に対しても、きわめて有効な手法である。消費あるいは所得を基準に据えて貧困ラインを設定し、それに満たない人々を貧困層として同定するという通常受け入れられている手法と比較しても、より安価でより具体性に富んだ手法である。この考えは、世界銀行の資金援助を得てチェネリーたちが実施した「成長を伴う再分配」報告書で採用されているが (Chenery *et. al.* 1974, pp.91-157), 残念ながらその後新古典派経済学が復興する中で消えてしまった。チェネリーたちの報告書では、貧困層は「ただ単に貧しいだけでなく、一連の政策が与える影響に関して同質的な人々のグループ」(p.91) と定義されており、具体的には (1) 小規模農民, (2) 土地なし労働者・準限界農民, (3) 都市不完全就業者, (4) 都市失業者, の4グループがターゲット・グループとみなされた。貧困研究を進展させる上で、見なおされてしかるべきアプローチである。
- (6) 『1980 年度世界開発報告』(World Bank 1980) は、貧困問題にフォーカスをあてた最初の開発報告である。その後世界銀行は 10 年置きに貧困特集を組んでいる (World Bank 1990; World Bank 2000)。
- (7) ジェームス・グラントはユニセフの指導者である。センによると、グラントは「貧困」を単に「低所得」の状態としてではなく、「悲惨で不安定な生活や早死を強いられる」状態として認識した。センは、「それは本当の意味での展望の転換であった」と高く評価している (Sen 1998)。またモリスは、「物的な生活の質指数 (Physical Quality of Life Index: PQLI)」の提唱者として、よく知られている人物である。PQLI は、「ミニマム・ベーシック・ニーズ」の達成度を計測する試みの 1 つである。1 歳時点での平均余命、幼児死亡率、識字率の 3 つの指標に同じウエイトをかけて算出するものである (Streeten *et. al.* 1981, pp.87-88)。後年センはベーシック・ニーズ・アプローチの欠陥を指摘するようになったが、その意義を高く評価していることには変わりがない。『ベーシック・ニーズ』に関する文献およびそれに関連した

『生活の質』に対する研究は、最も基礎的な財とサービスの剥奪と、それらが人々の生活に果たしている決定的な役割に、われわれの目を向けさせる上で非常に役だってきた」(Sen 1992, p.109)。

- (8) またセンは、韓国と同一の系譜として台湾を、スリランカと同一の系譜としてタンザニアを、それぞれ位置づけている。
- (9) 「韓国モデル」の解釈に関する議論については、絵所(1994)参照。
- (10) センの「スリランカ・モデル」をめぐる論争については、絵所(1999)参照。
- (11) センのノーベル経済学賞受賞記念講演は「社会選択の可能性」と題されている(Sen 1999c)。
- (12) ロールズの正義論およびロールズとセンの関係については、川本(1995)第1部第2章、第4章、第2部第3章、参照。
- (13) ここで示された考えは、その後さらに精緻さを加え、後期センの研究を代表する最も重要な成果となって結実した(Sen 1983c; Sen 1985b; Sen 1992)。
- (14) センは「伝統的開発経済学」と呼んでいる。
- (15) 後年センは、「開発分析の焦点は、人々が生きつづける生活の性格を含むべきである」と論じている(Sen 1988a)。
- (16) センの規範的経済学の基礎概念と特徴については、Sugden(1993); 鈴木(1998)をも参照。
- (17) 川本隆史は、「ファンクショニング(functioning)」に「さまざまな生き方=機能の充足」という訳語をあてている(川本 1995, pp.86-90)。
- (18) センが「機能」という言葉を最初に使用したのは、「何の平等」と題するタナー講義(Sen 1980b)である。「財」と「人」との関係について、センは次のようなチャートを示して説明している(Sen 1982c, pp.29-31)。

「財」→「特性」→「機能」→「効用」

「特性」は財の質をあらわすものである。一方、「機能」はこうした特性を利用できるかどうかにかかわっている。つまり「機能」は、純粋に財志向的なものでもなく、純粋に心理的なものでもない。例えば自転車という財は、人を遠方に運ぶというケイパビリティを人に与える。このケイパビリティは人に効用あるいは喜びを与えるかもしれない、という順序になると論じている。また別の箇所では、センは「機能できるケイパビリティ」という概念が、「生活水準」という概念に最も近いと論じている(Sen 1983c)。

- (19) アダム・スミスが『道徳感情論(*The Theory of Moral Sentiment*)』(1790)で論じた議論である。
- (20) 「エイジェンシー」という概念が最初に用いられたのは、Sen 1982b, で

ある。また彼のデューイ講義 (Sen 1985a) および『不平等の再検討』 (Sen 1992, Ch. 4) をも参照。桂木 (1995) pp.146-47, に簡単な説明がある。またこれらに先立つ 1976 年オックスフォード大学で行なったハーバード・スベンサー講義「合理的な愚か者」 (Sen 1977b) では、自己利益の追求だけを合理的行動とみなす現代経済学に対する対抗案として、センは「共感」と「コミットメント」という 2 つの行動原理を提出した。「共感」とは、「他者に対する関心が直接に自分の厚生に影響を及ぼす」ケースに対応した概念であり、一方「コミットメント」は「他者が苦しむことを不正と考えて、それをやめさせるために何かをする用意がある」ケースに対応した概念である（「正義感」とでも翻訳できるかもしれない）。「共感」は他者の苦悩を知ることによって個人的に具合が悪くなるように感じるケースであり、「コミットメント」はそうでないケースである (Sen 1990b, をも参照)。

- (21) 特筆すべきは、センの文章が著しく平明になったことである (Drèze & Sen 1995; Sen 1998; Sen 1999)。『飢餓と公共政策』の文体は、国連の世界開発経済研究所 (World Institute for Development Economics Research: WIDER) による「飢餓と貧困」プロジェクトの一環であったという事実が反映しているものと思われる。またジャン・ドレーズの協力を得たという事実も関係しているに違いない。いずれにせよこのあたりから、センは専門家向けの研究ではなく、一般読者向けの啓蒙活動へと方向転換したことは明らかである。
- (22) 『不平等の再検討』では、次のように述べている。「所得だけに注意を向ける貧困分析は、われわれの貧困に対する関心（すなわち、何人かの人が強いられる人生の限界）の背後にある主要な動機とは、まったくかけ離れたものである」(強調原文。Sen 1992, p.116)。
- (23) Sen (1995) をも参照。
- (24) センの文化大革命に対する評価を参照されたい (Sen 1982d)。
- (25) しかし公共活動によるルートと市場を通じたルートとの関係がどうなっているのかという点は煮詰まっていない。また公共活動が十分に機能しうするためには、政府の行政能力や政治的要因を考慮せざるをえないが、この点に関しても十分な考察がなされていない (Ravallion 1992; Anand & Ravallion 1993)。
- (26) 開発の性格を評価するにあたってとくに重要な機能は「選択の自由」であると論じた文脈で、センは次のような説得的な事例をあげて自由の意味を説明している。すなわち、「ある人が断食している時にその人はまちがいなく飢えているが、その人の機能の特性には飢えないという選択が含まれている。



- しかし極端に貧しい人は断食を選択することはできない」(Sen 1988a)。  
 Sen (1989); Sen (1993c) をも参照。
- (27) LSE 時代のセンの教え子であるカウシク・バサーは、センは「アカデミックでテクニカルな経済学の世界」と「政策とパンフレット作成者の世界」という「2つの世界を楽々とまたにかけた」と表現している (Basu 1999)。

#### 参考文献

- Ananad, Sudhir & Martin Ravallion 1993. "Human Development in Poor Countries: On the Role of Private Incomes and Public Services," *Journal of Economic Perspectives*, Vol. 7 No. 1 (Winter).
- Arrow, Kenneth J. 1999. "Amartya K. Sen's Contribution to the Study of Social Welfare," *Scandinavian Journal of Economics*, Vol. 101 No. 2.
- Atkinson, Anthony B. 1999. "The Contribution of Amartya Sen to Welfare Economics," *Scandinavian Journal of Economics*, Vol. 101 No. 2.
- Balassa, Bela 1981. *The Newly Industrializing Countries in the World Economy*, New York: Pergamon Press.
- Basu, Kaushik 1999. "Amartya Sen, Economics Nobel Laureate 1998," *Challenge*, Vol. 42 No. 2 (March-April).
- Chenery, Hollis, et. al. 1974. *Redistribution with Growth*, London: Oxford University Press.
- Datta-Chaudhuri, M. K. 1981. "Industrialization and Foreign Trade: The Development Experiences of South Korea and the Philippines," in Eddy Lee ed., *Export-led Industrialization and Development*, Singapore: Asian Employment Programme, ILO.
- Drèze, Jean & Amartya Sen 1989. *Hunger and Public Action*, Oxford: Clarendon Press.
- Drèze, Jean & Amartya Sen 1995. *India: Economic Development and Social Change*, Oxford: Clarendon Press.
- Drèze, Jean & Amartya Sen eds. 1990-91. *The Political Economy of Hunger*, 3 vols., Oxford: Clarendon Press.
- Drèze, Jean & Amartya Sen eds. 1996. *Indian Development: Selected Regional Perspectives*, Delhi: Oxford University Press.
- 絵所秀紀 1994. 「インド・モデルから韓国モデルへ：開発戦略の転換」萩原宜之編『講座現代アジア 3 民主化と経済発展』東京大学出版会, 1994, 所収。
- 絵所秀紀 1997. 『開発の政治経済学』日本評論社。

- 絵所秀紀 1999. 「『スリランカ・モデル』の再検討」『アジア経済』第 40 巻第 9・10 号.
- 絵所秀紀 2000. 「アマルティア・センのインド経済論」『経済志林』第 68 巻第 2 号.
- 絵所秀紀 2001. 「独立後インドの経済思想 (4): マハラノビス・モデル」『経済志林』第 68 巻第 3・4 号.
- GOI (Government of India) 1945. *Famine Inquiry Commission: Report on Bengal*, New Delhi.
- Hirschman, Albert O. 1981. "The Rise and Decline of Development Economics," in A. O. Hirschman, *Essays in Trespassing: Economics and Politics and Beyond*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 今岡日出紀・大野幸一・横山久 1985. 『中進国の工業発展—複線型成長の論理と実証—』アジア経済研究所.
- ILO (International Labor Office) 1976. *Employment, Growth and Basic Needs: A One-World Problem*, Geneva.
- 桂木隆夫 1995. 『市場経済の哲学』創文社.
- 川本隆夫 1995. 『現代倫理学の冒険—社会理論のネットワークへ—』創文社.
- 黒崎 卓・山崎幸治 2000. 「訳者解説: 『貧困と飢饉』—その後の 20 年—」(アマルティア・セン『貧困と飢饉』岩波書店).
- Ravallion, Martin 1992. "On 'Hunger and Public Action' A Review Article on the Book by Jean Dreze and Amartya Sen," *World Bank Research Observer*, Vol. 7 No. 1 (January).
- Roy, Sunando 1999. "The Economics of Amartya Sen-A Review," *Reserve Bank of India Occasional Papers*, April.
- Royal Swedish Academy of Science 1999. "The Nobel Memorial Prize in Economics 1998," *Scandinavian Journal of Economics*, Vol. 101 No. 2.
- Sen, Amartya K. 1960. *Choice of Techniques: An Aspect of the Theory of Planned Economic Development*, Oxford: Basil Blackwell.
- Sen, Amartya K. 1970. *Collected Choice and Social Welfare*, San Francisco: Holden-Day (志田基与師監訳『集合的選択と社会的厚生』勁草書房, 2000).
- Sen, Amartya K. 1976. "Famines as Failures of Exchange Entitlements," *Economic and Political Weekly*, Vol. 11, Special Number.
- Sen, Amartya K. 1977a. "Starvation and Exchange Entitlements: A Great Bengal Famine," *Cambridge Journal of Economics*, Vol. 1 No. 1.
- Sen, Amartya K. 1977b. "Rational Fools: A Critique of the Behavioural

- Science of Economic Theory," *Philosophy and Public Affairs*, Vol.6. Reprinted in Sen 1982a.
- Sen, Amartya K. 1980a. "Famine Mortality: A Study of the Bengal Famine of 1943," in E. J. Hobsbawm et. al. eds., *Peasant in History: Essays in Memory of Daniel Thorner*, Calcutta: Oxford University Press.
- Sen, Amartya K. 1980b. "Equality of What?" in S. McMurrin ed., *The Tanner Lecture on Human Values*, Cambridge: Cambridge University Press. Reprinted in Sen 1982a.
- Sen, Amartya K. 1981a. *Poverty and Famine: An Essay on Entitlement and Deprivation*, Oxford: Clarendon Press (黒崎卓・山崎幸治訳『貧困と飢饉』岩波書店, 2000).
- Sen, Amartya K. 1981b. "Ingredients of Famine Analysis: Availability and Entitlements," *Quarterly Journal of Economics*, Vol.95. Reprinted in Sen 1984b.
- Sen, Amartya K. 1981c. "Public Action and the Quality of Life in Developing Countries," *Oxford Bulletin of Economics and Statistics*, Vol.43 No. 4, November.
- Sen Amartya K. 1982a. *Choice, Welfare and Measurement*, Cambridge & London: Harvard University Press (大庭健・川本隆史 [部分] 訳『合理的な愚か者』勁草書房, 1989).
- Sen, Amartya K. 1982b. "Rights and Agency," *Philosophy and Public Affairs*, Vol.11.
- Sen, Amartya K. 1982c. "Introduction," in Sen 1982a.
- Sen, Amartya K. 1983a. "Development: Which Way Now?" *Economic Journal*, Vol.93 (December).
- Sen, Amartya K. 1983b. "Economics and the Family," *Asian Development Review*, Vol.1, Reprinted in Sen 1984b.
- Sen, Amartya K. 1983c. "Poor, Relatively Speaking," *Oxford Economic Papers*, Vol.35. Reprinted in Sen 1984c.
- Sen Amartya K. 1984a. "Introduction," in Sen 1984c.
- Sen, Amartya K. 1984b. "Family and Food: Sex Bias in Poverty," in Sen 1984b.
- Sen, Amartya K. 1984c. *Resources, Values and Development*, Cambridge, Massachusetts & London: Harvard University Press.
- Sen, Amartya K. 1985a. "Well-being, Agency and Freedom: The Dewey

- Lectures 1984," *Journal of Philosophy*, Vol. 82 No. 4.
- Sen, Amartya K. 1985b. *Commodities and Capabilities*, Amsterdam: Elsevier Science Publishers B. V. (鈴木興太郎訳『福祉の経済学』岩波書店, 1988).
- Sen, Amartya K. (Geoffrey Howthorn ed.) 1987a. *The Standard of Living*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Sen, Amartya K. 1987b. *On Ethics and Economics*, Oxford: Blackwell.
- Sen, Amartya K. 1988a. "The Concept of Development," in Chenery & Srinivasan eds. 1988.
- Sen, Amartya K. 1988b. "Africa and India: What Do We Have to Learn from Each Other?" in K. J. Arrow ed., *Balance Between Industry and Agriculture in Economic Development*, Vol. 1, Houndmills & London: MacMillan.
- Sen, Amartya K. 1989. "Food and Freedom," *World Development*, Vol. 17 No. 6.
- Sen, Amartya K. 1990a. "Development as Capability Expansion," in Keith Griffin & John Knight eds., *Human Development and the International Development Strategy for the 1990s*, United Nations: MacMillan, 1990.
- Sen, Amartya 1990b. "Individual Freedom as a Social Commitment," *New York Review of Books*, June 14 (川本隆史訳「社会的コミットメントとしての自由」『みずす』1991年1月号).
- Sen, Amartya K. 1990c. "More than 100 Million Women are Missing," *New York Review of Books*, December 20 (川本隆史訳「1億人以上の女たちの生命が喪われている」『みずす』1991年10月号).
- Sen, Amartya K. 1992. *Inequality Reexamined*, Oxford: Oxford University Press (池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳『不平等の再検討：潜在能力と自由』岩波書店, 1999).
- Sen, Amartya K. 1993c. "Markets and Freedom: Achievements and Limitations of the Market Mechanism in Promoting Individual Freedom," *Oxford Economic Papers*, Vol. 45 No. 4, October.
- Sen, Amartya K. 1995. "Rationality and Social Choice," *American Economic Review*, Vol. 85 No. 1 (March).
- Sen, Amartya K. 1997. "Policy Making and Social Choice Pessimism," in A. Bose, M. Rakshit & A. Sinha eds., *Issues in Economic Theory and Public Policy: Essays in Honour of Tapas Mazumdar*, Delhi: Oxford University Press.
- Sen, Amartya K. 1998. "Mortality as an Indicator of Economic Success and Failure," *Economic Journal*, Vol. 108 (January).

- Sen, Amartya K. 1999b. *Development as Freedom*, Oxford: Oxford University Press (石塚雅彦訳『自由と経済開発』日本経済新聞社, 2000).
- Sen, Amartya K. 1999c. "The Possibility of Social Choice," *American Economic Review*, Vol.89 No.3 (June).
- Streeten, Paul *et. al.* 1981. *First Thing First: Meeting Basic Needs in Developing Countries*, Published for the World Bank, Oxford University Press.
- Sugden, Robert 1993. "Welfare, Resources, and Capabilities: A Review of *Inequality Reexamined* by Amartya Sen," *Journal of Economic Literature*, Vol.31 (December).
- 鈴木興太郎 1998. 「機能・福祉・潜在能力—センの規範的経済学の基礎概念—」『経済研究』Vol.49 No.3 (July).
- 渡辺利夫 1982. 『現代韓国経済分析—開発経済学と現代アジア—』勁草書房.
- World Bank 1980. *World Development Report 1980*, Oxford: Oxford University Press.
- World Bank 1990. *World Development Report 1990: Poverty*, Oxford: Oxford University Press.
- World Bank 2000. *World Development Report 2000/2001: Attacking Poverty*, Oxford: Oxford University Press.

## Amartya Sen: Development Ideas in the Later Phase of His Work

Hideki Esho

### 《Abstract》

In this study, the author has attempted to trace and evaluate the evolution of Dr. Amartya Sen's philosophy of development.

Late in the 1970's, Dr. Sen embarked upon a series of projects that characterize the recent phase of his work. In his initial researches in this new stage, he undertook an analysis of the great Bengal famine of 1943, in which he employed the concept of exchange entitlement. The chief object of this exchange entitlement approach was a criticism of the 'food availability decline' approach prevalent in famine analysis at the time. Thereupon, he expanded the concept of entitlement to incorporate evaluation of 'quality of life,' and stressed the importance of public action in eradicating poverty (Chapter 1). Another further key concepts for understanding Dr. Sen's ideas on development, particular significant can be laid upon 'functioning' and 'capability'. He made use of these concepts to criticize the utilitarianism or utility approach to human welfare: namely, the basic philosophy of the neo-classical welfare economics.

In addition, he applied the same concepts to development issues. Thus he paved ways for new development studies, which were subsequently followed not only by 'human development' approach of the UNDP, but also by the 'participatory poverty assessment' approach of the World Bank (Chapter 2). With the co-operation of Jean Drèze, Dr. Sen continued his expansion of the enlarged capability approach to analyze and define famine and malnutrition in developing countries as the two basic types of human deprivation (Chapter 3).

Lately, he has further stressed ideas such as 'development as

freedom' and 'poverty as human deprivation.' Chief characteristics of Dr. Sen's later output is his positive concern for enlightenment activity: this differs from his earlier scholarly studies of social choice, but still shares the same passion for eradicating poverty in India that has typified his philosophy and his work throughout his career.